道産子史

工藤　仁子

東京で暮らしてもう四十年が経ち、北海道との縁も薄らいでいくばかりだけれど、有難いことに父が未だに健在で、北海道で元気に暮らしているので、年に一度は北海道に帰っている。

私が北海道に帰るときはいつも娘が一緒だ。娘は東京生まれだが、一時北海道の両親に預けて育てたこともあり、余程北海道に里心をつけているのか、道産子を自称している。

父はこの孫娘にぞっこんで、娘が二十歳を過ぎ、父と晩酌を交わせるようになってからは、決まって夕食の後には酒盛りが始まる。そして孫の顔などを見ていると、自分の若い頃の時のことが思い出されるようで、近くて五十年前、遠くのものになると七十年以上は経っているような思い出話を語り始める。

齢九十三とは思えない流暢さで、幼少期の頃の逸話や、青年時代のやんちゃだった話、祖父母との想い出などその話題は尽きることがない。もうそろそろ話の種も底を尽くのではと思うのだが、まだ聞いたこともない話が湧き出して驚かされるのが常だ。若い人にはつまらない話なのではと思うのだが、娘はいつもふんふんと頷きながら聞いている。道産子は私の代で終わりだと思っていたが、この父との交流のなかで娘はますます道産子化しているようだ。

昔は、赤く火照った顔で冗長に話される父の昔話を聞くのは、かなり苦手だった。しかし、娘につられて我が家のルーツにまつわる父の話に耳を傾けると、どの話もなかなかに趣き深かく、面白い。

私自身も還暦をすぎ、ふと自分の人生を振り返ることが多くなった。ご縁という言葉があるが、小さな切っ掛けが後の自分に繋がることが多く、縁とは不思議なものだと思わされる。しかも、自分の知らないところで縁が始まることもある。酒の肴に聞く父の昔話の中にも、今の自分をつくっているご縁を感じる瞬間もある。

そのような折に、「水源地」への寄稿の話をいただいた。父の語り聞いた北海道での自分のルーツにまつわる話を文章にするよい機会だと思い、我が家の北海道史をしたためた。

後志（しりべし）管内にある黒松内の大峰から流れる朱太（しゅぶと）川の下流に、寿都（すっつ）という町がある。人口がわずか三千人ほどの小さな町で、北海道でも知名度が高いとはいえなかったが、最近、高レベル放射性廃棄物、いわゆる「核のごみ」の最終処分場の候補地として誘致に名乗りを上げ、一躍、全国にその名が知られた。

嘗てこの町は、江戸時代は松前藩とアイヌの人達との交易の場として栄え、明治時代には鰊の一大漁場として、北海道でも最も栄えた場所の一つだった。

私は道産子五代目で、我が家の北海道史は、この寿都町歌棄（うたすつ）村字種前（たねまえ）から始まる。私の高祖父は、この地の鰊漁で一代で財を築きあげた岡田金作（きんさく）である。岡田金作は石川県の出身で、全国を渡り歩き漁網や漁具の行商で生業を立てていた。商才があったのだろう、北海道に渡りこの歌棄で漁場を見つけ、この地に根を下ろし網元として漁業を営んだ。

高祖父が作ったという倉庫が、今もこの地にひっそりと残っている。すっかり朽ちはててしまっているが、レンガづくりのこの倉庫は中が

総檜づくりで、建てた当時はとても立派なものだったそうだ。鰊漁業が華やかなりし頃は、この倉庫一杯に、大量の魚網が収められていた。

また、ここから少し離れた美谷（びや）地区には、間口十二間、奥行き十間ほどの大きな母屋に続く番屋があった。高祖父の時代には、番屋には、常に四十人以上のヤン衆と呼ばれた鰊漁夫が全国から集まり、住み込みで鰊漁を営んでいた。漁の季節になると海岸は、鰊の群来で白く染まり、きゅうりのような独特な匂いが岸辺に漂よい、魚が面白いように取れたという。全盛期の岡田家は、丸本岡田と屋号で呼ばれ、厠に紙がきれても、お金はきれることを知らなかったという逸話があるほど鰊で潤っていたそうだ。

金銭的には恵まれていた岡田家であったが、子宝には恵まれなかったようである。時代もあるのだろうが、我が家の家系図を紐解くと、養子・養女の多さに驚かされる。当方の祖父の岡田徳治（とくじ）もまた、岡田金作の分家の養子で、同じ種前村の小西治右エ門の五男である。

祖父は昭和天皇を少し温和にしたような顔立ちで、性格は学者にこそ相応しいというほどの中々の凝り性で、文芸に親しむ文化人だった。また、明治気質で躾には大変厳しい人だったそうだ。

祖父は私が小学校五年生の時に亡くなっており、私には祖父に厳しく躾けられたという記憶はない。思い出されるのは、書き溜めたノートや古い分厚い辞書を虫眼鏡で物静かに見ている姿だ。そしてもう一つ、祖父の買ってきてくれるスイカはいつも黄色いスイカだったことを覚えている。買ってくれたスイカを食べていると、スイカとその種まきの絵が描かれている大学ノートを見せてくれて、「北海道で初めて黄色いスイカを育てたのは自分だ」、というのが祖父の口癖だった。子供心に赤いスイカの方が美味しいし、農作物を研究して畑を耕すという姿が似つかわしくない祖父が、黄色いスイカを初めて育てたというのもほら話だと思っていた。

けれど、ご縁とは不思議なもので、この祖父の本業からはずれた研究者ぶりを、後に孫の私は札幌大学（以降、札大）の授業で偶然に知ることとなる。当方が学生時代の札大は大変鷹揚で、まじめにやる気を持って授業を受けさえす

れば、短期大学であれ四年制大学であれ、自由に授業を聴講することができた。学生が何人増えようとも、教室に入るのであれば問題にされなかった良き時代である。そのため一時、日本文学に興味を持った私は、四年制の外国学部（ロシア語学科）に身を置きながら、短大の国文学の授業によく参加させていただいた。特に、後に札幌大学学長を務められた、木村真佐幸教授の授業には熱心に参加した。木村教授は樋口一葉研究の第一人者だが、その授業中に、若い頃アイヌ語の研究をしていた話をされ、探し求めて恩師から譲り受けたアイヌ語に関する研究の貴重文献の著者として祖父の名前を偶然にも挙げられた。祖父がアイヌ語を研究していたという話は母から聞いて知っていたが、素人の趣味程度に思っていた。そのため祖父の文献の詳細で緻密なアイヌ語研究の様子を教授から伺った時は驚いた。そして、また、なぜかその時祖父の黄色いスイカの話を思い出し、あの黄色いスイカの話も確かに本当で、祖父の自慢の一つだったのだろうと、合点できた。

アイヌ語の研究のエピソードからも伺えるように、祖父は言葉の成り立ちや意味に強い関心を持っていたようである。私の〈仁子〉とかいて〈とよこ〉と読む難解な名前も、祖父が名付けてくれたものである。私の出生届けに書かれた「仁子」の名を、「とよこ」とは読めないと首をなかなか立てに振らない町役場の役人を、祖父が分厚い漢字辞典を見せて説き伏せたという。

祖父の名付けのこだわりには、他にもこんなエピソードがある。祖父は、隣村の山上と呼ばれる地域の網元の娘であった村田熊（くま）と明治四十二年（一九〇九年）に結婚する。熊とは中々に厳めしい名前である。祖母は父が若い頃に亡くなっており、会ったことはないが、今も家に残る写真からうかがう祖母は通った鼻筋が印象的で、ほっそりとした細面の美女だ。東京の女学校を卒業しており、刺繍が評判で字がとても美しい才色兼備な女性だったという。名は体を表すというが、熊という名は祖母の風体とは齟齬がある。祖母の熊という名前の命名は、死産で女の子をなくした両親が丈夫に育つようにと験を担いで名付けた親心によるものだったそうだが、祖父は、祖母の人となりと名がそぐわないのが気に入らず、「のよ」という名に改名させた。

結婚後、岡田徳治、のよ夫妻は二女、七男に恵まれる。当方と同じく難読な名をもつ、我が父岡田士徳（あきのり）はこの九人兄弟の六男坊である。

祖父徳治の代になり順風満帆であった家業は、鰊業の衰退とともに影を落とし始める。父が五才のころ家業は立ちゆかなくなり、一家は、家屋等を親戚に譲り、函館の親戚を頼って歌棄村を離れることになる。

函館に移り住んだ一家は、五稜郭にあった祖母の兄の村田信之助の家近くに住居を構える。信之助の家は当時には珍しい三階建ての白い大きな洋風の瀟洒な家で池が三つもあった。幼い父は兄弟とともに良く遊びに行っては、二階から釣り糸を池にたらし、魚つりに興じたそうだ。その後、父一家は、函館の大火（一九三四年三月二十一日）の後、父が尋常小学校三年の時に札幌の創成川近くに移り住む。

父一家が札幌に移るのと時を同じくして、村田信之助は、ロシアとの商売をやめ、函館から青森に移り住み、薬局屋（現在の八戸駅前の「サクラ薬局」）に転身した。父が旧制中学二年生の時、祖母の兄である信之助は何故かとても父を気に入り、実子がいるのにも関わらず、父を薬局屋の跡取りとして養子にくれと申し出たそうだ。父は、「家に米糠三升もないのか。あ

れば子供を養子になどやらないものだ」と信之助の申し出に躊躇する母親を説得し、養子に行く難を逃れたという。父のその時の判断で、道産子五代目の私が誕生することとなる。

こうして振り返ってみると、今の私の存在自体が様々な縁によるものと感嘆する。そして、不思議な心持にさえなる。

縁と言えば、私とロシアとの縁も父から始まっている。私が札幌大学のロシア語学科に入学するきっかけとなったのは、父の一言だった。大学受験の際、志望学科として無難に英文学科を選ぼうとしていた時に、父から「ロシア語の方が良いのでは」と言われ、その時初めて私の人生に「ロシア語」というものが登場した。昔気質で外国人に対してどちらかというと排他的だと思っていた父から、外国語、それもロシア語を勧める言葉が出てきたことは、当時は意外だった。

昨今、恒例の父との晩酌の際に、父とロシアの縁を知った。先に紹介した函館の地で我が家とロシアとの縁は始まっていた。父を養子にしようとしていた村田信之助は、樺太へ頻繁に足を運んで手広く商売をしていたらしく、明日は樺太に行きロシア人と商談をする、というような話を良くしていたそうだ。そのため、父は幼い頃、この叔父からロシアの話をお土産話として聞かされていた。また、村田信之助は商売上だけではなく、私的にもロシア人と親交があった。信之助は狩猟を趣味としており、趣味の繋がりで、日本に渡り函館の畳屋の娘と結婚していたカルロフという白系ロシア人と交流を持っていたそうだ。このカルロフというロシア人は祖父岡田徳治とも気が合い、祖父を訪ねて家にも良く遊びにきていた。カルロフとは家族ぐるみで付き合いがあったようで、当時幼かった父とも親しかったのか、「畳屋のカルロフ」と父は呼んでいた。カルロフは、父一家が札幌に移り住んだ後もわざわざ函館から札幌に遊びにやって来たそうだ。

道産子五代目の私は、現在、東京でロシア語の講師の仕事をしている。父の一言でロシア語を学んでから四十五年の日々が流れている。父たちのような家族ぐるみの縁ではないが、五代目の私とロシアのご縁もなかなか深い。ロシアとのこの三代にも渡る我が家との縁も実に不思議なご縁である。

我が家の北海道での家族史である「道産子史」は、自称六代目道産子に託され、加筆されていくだろう。寄稿の機会を与えてくれた発行人の粕谷氏と校正担当の村野氏には心から感謝したい。